

新学術領域・若手研究者海外派遣プログラム報告書

北海道大学生命科学院 生命システム科学 修士1年 早瀬 晋

出張先：第42回北米神経科学研究会

(42nd annual meeting of the Society for Neuroscience:SfN2012)

In New Orleans, at the Ernest N. Morial Convention Center

今回私は新学術領域若手研究者海外派遣プログラムからの助成を頂き、アメリカ・ニューオーリンズで行われる北米神経科学研究会に参加、ポスター発表をさせて頂きました。本年度の発表ポスターは16000枚以上。5日間巨大なコンベンションセンターを貸し切って行われるこの会議は、神経科学分野において世界最大規模の研究集会と言えます。現在私はソングバードの音声発声学習における学習臨界期の神経分子基盤を明らかにする事を目的として研究しており、本大会における題目は「Continual vocal behavior influences induction of motor-driven genes in songbird vocal areas」。内容は学習臨界期中と臨界期後の轉りに対する、脳内神経活動依存的な遺伝子発現誘導率の違いを検証したものでした。

会議前の数日では各分野のサテライトミーティングが行われ、私はその中の一つである **Neural and Genetic Basis of Vocal Communication** に参加するため一日早く会場入りしました。そこで論文の著者欄でしか見たことのない研究者達がそこかしこに歩いているのを見て、私は最初の衝撃を受けました。日本におけるソングバードの研究者は依然少数であり、普段チェックしている論文の著者に会える機会はそうそうありません。そのような中初の国際会議、それも音声発声行動に関わる研究者が集まるミーティングというわけです。「論文を書いているのはこの人達なのだ」恥ずかしい事ですが、何度もその必要性を説かれながらも私はこれまで論文を読む時に著者欄というものを殆ど活用できていませんでした。紙面の無機質な名前や所属を何度読み返してもわからない人々の表情や声、考えを聞いて私は初めて「この人は過去にどのような研究をしてきたのだろう、この分野はどのように育ってきたのだろう」という、いわば基礎の基礎にたどり着くことができました。そういった意味で、修士1年という早い段階でこのようなチャンスをいただけたのは本当にありがたい事であると強く思います。

メインの5日間が始まり神経科学という一つの分野に強い興味を抱く人ばかりが人種・国籍を問わず数万人も集まると、ニューオーリンズ中心部の雰囲気は一変しました。カフェを覗いても路上でさえも、三歩歩けば脳・神経を話題に議論をしている人々に出くわします。会場では著名な教授が学生に混じってポスターを眺めている。これらの光景も、数日にわたって行われる国際学会ならではのものです。

ソングバード研究者の方々に対して発表するのは緊張すると同時に、すばらしい体験でした。自分が面白いと思う所で共感して頂けるだけでなく、その方の着目している現象や脳部位によって同じデータでも受け取り方が全く異なり、考えもしなかったアイデアや見落としていたポイントが浮かび上がってきました。同じ分野の研究者だけでなく神経科学一般の研究者が興味を持っている事を知ること、自分が神経科学分野の中でどのような

役割を背負う事ができるかを強く考えさせられました。最先端の技術や研究が集まる学会で、現在の神経科学研究の全体像をおぼろげながら意識できた事も良い体験でした。

今回の経験を通して私は、これまで書いてきたような、口で言われただけでは得難い教訓・実感を得られました。人によって初めての国際学会の受け取り方というのは千差万別であるとは思いますが、しかし今後も何らかの形でこのような支援が存続し、私が経験したような貴重な体験を得られる人がまた生まれれば、それは本当に素晴らしい事だと思います。最後になりますが、今回旅費をご支援して下さいました本領域研究若手研究者海外派遣プログラムの先生方、領域事務としていつも迅速な対応をして下さいました岩原様に心より感謝申し上げます。

